

八月葉月は水縹色

奥村 俊三

朝の喧しい蝉時雨も、日が昇り切るとぴたりと止む。午後、ふと空を見上げれば、もくもくと力強く立ち上る夏の雲。まだ真っ白で逞しい姿に、「夏の雲は岩のごとく、秋の雲は砂のごとく、か」と独りごちる。空を刷毛で掃いたような秋の気配は、まだ少し先のようだ。それでも暦の上では八月七日、立秋を告げる。それならば秋を待つまでの間、この眩しい夏をたっぷりと堪能してみようか。

水縹色（みはなだいろ）は、伝統的な和色である。かつて万葉集に記されたこの色は、やがて水色と併用され、中世になると水色が主流となり、現在に至っている。縹（はなだ）とは、藍染の際に青い染料が水に漂う様子から名付けられたという。その透明感は、夏の装いにふさわしい。



写真は、波の音も涼やかな富山県雨晴海岸